

大学生にとって、いま「大学」とは？（Ⅱ）

－大学生の日常生活－

○熊丸真太郎（徳島文理大学短期大学部）

○片山 悠樹（大阪大学大学院）

秦 政春（大阪大学）

○三戸 香代（北里大学）

○澤野 千絵（大阪大学大学院）

1 はじめに

これまで大学生について論じられる場合、学力や授業といった教育活動そのものに注目が集まっており、日常生活はあまり注目されてこなかった。大学生を対象とした調査でも、学力など教育活動に関する調査や、ストレスなど精神面を取り扱った調査はこれまでもあった。しかし、授業以外の日常生活で、どのような行動を、どの程度行っているかといった面について取り扱った調査は多いとはいえない。たとえば、「大学生は勉強しない」などと語られるが、どれくらい勉強していないのか（あるいは勉強しているか）を具体的に示すデータはこれまであまりなかったといえよう。

このように、これまで大学生の日常生活は、印象論で語られることが多く、データにもとづいた議論がなされているとはいえない。しかも、その印象の多くは「今が楽しければそれでよい」、「授業には出席せずに、アルバイトやサークル活動には熱心である」、「元気がない、やる気がない」など大学生をネガティブにとらえている場合が多い。

はたして実際の大学生はどのような生活を送っているのか。そして、本当にネガティブな側面ばかりが当てはまるのだろうか。また、大学生といってもひとくくりにして語ることができるのか。こうしたことについて考えていくためには、まず大学生の日常生活を明らかにする必要がある。

そのため、大学生の日ごろの行動についてみる。とくに、大学生の一日の過ごし方を記録した生活時間に着目する。それは大学生の1日24時間の使いかたから、大学生の行動パターンを見いだすことが可能となるからである。

さらに、大学生が自分自身をどのようにとらえているかについて属性の違いなどから分析する。

こうした行動的な側面と精神的な側面の両面から大学生の日常生活について明らかにする。

大学生の日常生活は、大学教育を考えていくうえで欠かせない。それは、大学生にとっては大学での学習活動と日常生活は切り離せるものではなく、あくまでも日常生活の行動の一つとして大学での学習活動があるからである。授業以外の活動（たとえばアルバイトやサークル）に熱中するこ

とが大学での授業に対する意欲を減退させることはあるだろうし、授業のおもしろさが日常生活を豊かにすることもあるだろう。

本発表で用いるデータはわれわれが2003年6月から11月にかけて行なった「大学生の生活意識に関する調査」（20大学・有効回答数2663名）によるものである。なお、生活時間の分析にあたっては、記入されたもののみを対象としたため、平日は2290人、休日は2190人が分析対象である。

また、分析においては、学年別、学部・学科カテゴリ別、大学ランク別による分析を行なう。学部・学科カテゴリについては、回答者の所属学部・学科などをもとに、①文科系、②理科系、③医療系、④教員養成系、⑤学際系の5つに分類した。大学ランクについては、対象となった20大学をあくまでも便宜的に、旧帝大や全国有名私立大を「ランクⅠ」に、地方私立大を「ランクⅢ」に、その他の大学を「ランクⅡ」に相対的に分類した。

2 日常生活からみる大学生の「実態」

すでに述べたように、大学生が日々どのように過ごしているかといった視点から、大学生の実態をとらえることは多くはなかった。だが、大学生の実態を明らかにするのに、彼らの日常生活を把握することは不可欠である。

そこで本章では、現代の大学生がどういった日常生活を過ごしているのか、に焦点をあて、検討したい。

(1) 大学生の勉強時間

大学生をネガティブに語る風潮は根強い。そのように語られる大きな理由は、「大学生が勉強しなくなった」というイメージが、いまなお存在しているためではないか。

大学生の「勉強離れ」については、戦後からいわれつづけている。とくに、1980年代から90年代にかけて、大学生の勉強時間は減少傾向にあり、高校生の勉強時間よりも短いといった指摘がされるほどである。

では、現代の大学生は、いまなお「勉強してい

ない」大学生のままなのであろうか。こういったことを、現代の大学生の勉強時間と過去の大学生の勉強時間との比較、または小学生、中学生、高校生のそれぞれの勉強時間との比較という2つの観点からみていきたい。

なお、過去の大学生との比較に用いた資料は、NHK 世論調査部編「日本人の生活時間」である。また、小学生、中学生、そして高校生との比較に用いた資料は、われわれがこれまで行なった3つの調査である。小学生に関しては、「児童の学校生活に関する調査」(1999年実施)、中学生では「生徒の学校生活に関する調査」(2000年実施)、そして高校生では「高校生の生活に関する調査」(2001年実施)である。

1) 過去との比較

まずは、現代の大学生の勉強時間と、1980年代、90年代の大学生の勉強時間との比較からみてみよう。大学生の平日の勉強時間をみると、80年では87分、85年では76分、90年では60分となっている。そして、われわれの調査では、100分である。同様に休日では、92分(80年)、92分(85年)、71分(90年)、そして109分(われわれの調査)である。

80年代から90年代にかけて、平日、休日とも、大学生の勉強時間は低下していた。しかし、現代の大学生の勉強時間は、80年代、90年代の大学生と比べて、勉強時間が増えている。

確かに、単純に比較はできないものの、過去の大学生に比べると、現代の大学生は勉強しているといえる。このような傾向は、「学生の消費生活に関する実態調査」からも指摘できる。「学生の消費生活に関する実態調査」によれば、1995年以降、学生生活のなかで「勉強」を重視する大学生の割合が急増している(武内2003)。

現代の大学生は、これまでのような「勉強していない」大学生ではないといえる。

2) 小・中・高校生との比較

これまでの大学生は、高校生に比べて、勉強時間が短いといわれていた。そこで、大学生の平日の勉強時間を、小学生、中学生、高校生の勉強時間と比較してみよう。

表1 平日の勉強時間の平均(分)

小5・6	中1	中2	中3	高1	高2
70	74	57	168	50	44
大学生全体	文科	理科	医療	教員養成	学際
100	66	104	157	144	54

表1をみると、大学生全体の平日の勉強時間は、高校受験を控えている中学3年生には及ばないものの、高校1、2年生、または中学1、2年生よりも長い。

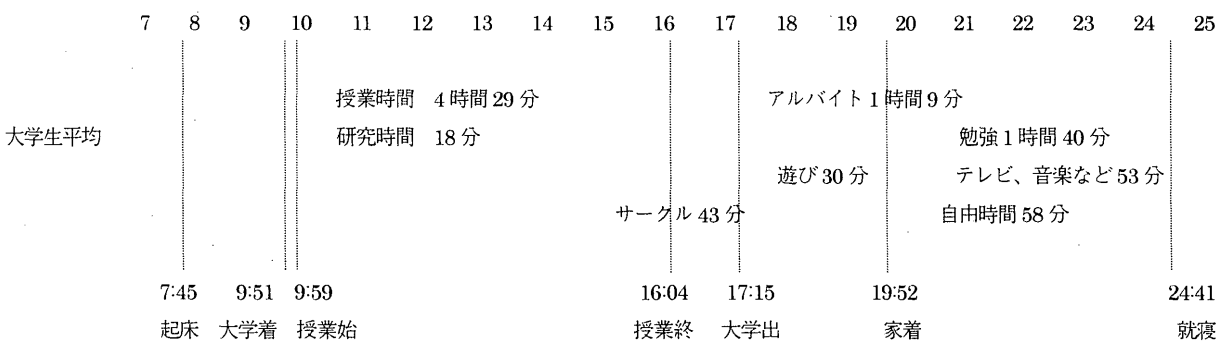
大学生の勉強時間を学部・学科カテゴリーごとにみると、医療系と教員養成系の学生の勉強時間が、もっとも長くなっている。そして、その時間は、中学3年生の勉強時間に近い。その一方で、文科系と学際系の学生の勉強時間は、医療系や教員養成系の学生に比べると少ない。とはいえ、文科系、学際系の学生は、高校1、2年生よりも勉強しており、中学2年生と同じくらい、平日に勉強することに時間を費やしている。

こうした傾向をみる限り、「勉強していない大学生」というイメージとは、遠い。現代の大学生は、勉強に時間を費やす「マジメ」な学生なのではないだろうか。

(2) 大学生の一週間

さきに、勉強時間の比較から、現代の大学生の実態についてみてきた。つぎに、彼らが平日、または休日をどのように過ごしているのか、という「生活パターン」を検討したい。なお、生活パターンを明らかにするため、何をどのくらい行なったかという「行動時間」と、いつ起床し、帰宅したかという「時刻」を用いる。

表2 大学生の生活形態(平日)



1) 平日の大学生

表2は、大学生の平日の過ごし方をあらわしたものである。

大学生全体でみると、朝7時45分に起床し、10時前には大学に到着している。そして、7時間ほど授業など、大学のなかで過ごしている。授業が終わってからは、サークル・部活動や遊びではなく、勉強することにもっとも多くの時間を費やしている。

現代の大学生の生活パターンをみると、「大学生は遊んでばかり」、「勉強もせずにアルバイトに明け暮れる」といった従来のイメージとは、かけ離れている。

以下、大学生が平日をどのように過ごしているか、を学部・学科カテゴリー別、大学ランク別、そして住居形態別に検討していく。

2) 休日の大学生

本章の最後に、「平日の大学生」同様に、大学生が休日をどのように過ごしているのかを明らかにして、現代の大学生の生活パターンから、彼らの実態について述べることにする。

3 大学生の自己意識

(1) 悩める大学生

大学入試を終え、もはや受験ストレスもなく、自由な時間も持ちやすい大学生はどのようなストレスを感じているのだろうか。ここでは、大学生のストレスについて、その要因と卒業後の職業や生活時間との関連からみていくことにする。

1) ストレスの全体像

「あなたはストレスを感じることがありますか」という質問に対して、「とても感じる」「やや感じる」「あまり感じない」「まったく感じない」の4段階で回答を求めた。大学生は「とても感じる」「やや感じる」を合わせると8割近くが程度の差はあれストレスを感じていた。われわれがこれまで行なった調査において、学校段階別のストレスは小学生48.9% (1999年)、中学生63.2% (2000年)、高校生80.4% (2001年)であった。これと比較すると大学生がストレスを感じる割合は高校生に近いようである。

さらに学部・学科カテゴリー別にストレスを「とても感じる」と答えた割合をみると、医療系の学生のストレスが他と比べて高かった。学年別にみても、医療系では3年生で他の学年よりも高くなっていた。しかし、理科系や教員養成系では3年生でストレスが低くなっていた。医療系、教員養成系ともに3年生より病院実習や教育実習が

始まるという点では共通しているが、その期間や対象、課題などの違いにより学生に与えるストレスは異なるのであろう。

2) ストレスの要因

では、大学生は何に対してストレスを感じているのだろうか。

「友人」「勉強」「恋愛」「金銭」「家庭」「アルバイト」「サークル・部活動」「進路」「性格」「能力」「容姿」「その他」の原因別にみると、友人や恋愛といった人間関係よりも「勉強」が6割を占め、もっとも高かった。学部・学科カテゴリー別にみると、医療系では「勉強」や「能力」、「性格」について他の学部・学科カテゴリーの学生よりもストレスを感じていた。医療系の場合、国家試験受験資格を取得することが卒業要件となり、ほとんどの学生が卒業後に特定の職業に就くことになる。また、医療の場での対人援助職として学生は「勉強」だけでなく、「性格」や「能力」を問われることも少なくない。こうした職業に関する限定された選択肢が学生を追い込んでいるのかもしれない。

では、学部・学科カテゴリーを問わず卒業後の職業が明確な学生とそうでない学生とでは、「勉強」に対するストレスは異なるのだろうか。「大学を卒業したらどのような職業につきたいか、決まっていますか」という質問に対して、「決まっている」「ほぼ決まっている」「あまり決まっていない」「まったく決まっていない」の4段階で回答を求めたところ、「決まっている」と「ほぼ決まっている」を合わせると6割にのぼっていた。学部・学科カテゴリー別では医療系の8割が「決まっている」と答えており、教員養成系がそれに次いで高かった。

さらにストレスとの関連をみると、医療系では就きたい職業が決まっている学生の方が「勉強」や「能力」にストレスを感じていた。しかし、理科系や学際系では就きたい職業が決まっている学生の方が「勉強」のストレスは低かった。一方、教員養成系では就きたい職業が決まっているか否かで「勉強」に対するストレスに違いはみられなかった。とはいえ、卒業後の職業が本人にとって明確な方が、なぜ勉強するのかという意味づけをしやすく、「勉強」に対するストレスが低下するかもしれない。

3) 勉強に追い立てられる大学生

第2章において大学生が勉強に多くの時間を費やしていることを述べた。では、勉強時間の長い学生はストレスを感じているのだろうか。平日に

まったく勉強していない学生でも6割は「勉強」にストレスを感じていた。さらに平日の勉強時間が3時間以上になると「勉強」にストレスを感じる割合は高かった。また、休日に勉強している学生では「勉強」に対するストレスが高く、その勉強時間が長いほどストレスは高かった。休日にまで勉強しなければならない状況は、大学生に「勉強」に対するストレスをもたらしているといえよう。

(2) 自信がある大学生、自信がない大学生

一般的に、大学生は、気楽で悩みがなさそうなイメージで語られるが、彼ら自身は、自分自身をどのようにとらえているのだろうか。本節では、主に彼らが自分に対して持っている「自信」を中心にみていくことにする。自分に自信を持っているのは、一体どのような大学生なのだろうか。

1) 大学生の自信

大学生は、どの程度、自分に自信を持っているのだろうか。「あなたは自分に自信がありますか」という質問に対して、「とてもある」「ややある」と答えた学生の割合は、全体の37.9%に止まる。自分に自信を持っている大学生は多くないといえることができるだろう。

それでは、この自信とは、どのような要因と関連があるのだろうか。ここでは、①大学生活、②将来展望という2つの要素について、自信との関連をみていくことにする。自信とは、自分自身に対して抱いている意識であり、それは、彼らが送っている大学生活に何らかの関連があるのではないだろうか。また、大学生の多くは、卒業後、社会に出ることになるが、就職を含めて彼らはどのような将来展望を描いているのだろうか。また、それは、彼らが抱いている自信と、どのような関連があるのだろうか。

2) 自信と大学生活

a 自信と「学力」

前節までの分析において、大学生は、勉強に多くの時間を費やしており、勉強に対してストレスを抱えている学生が多いということが明らかになった。このことからわかるように、勉強は、大学生にとって大きな意味を持つものであり、大学生自身や、彼らの生活について考える際に、重要な要因であると考えられる。そこで、まず、勉強と関連して、大学生が自分の学力についてどのような認識をしているのかについて少し詳しく取り上げてみたい。また、その認識は自信にどのように結びついているのだろうか。

「あなたは今、大学生としてふさわしい学力を身に付けていると思いますか」という質問に対し、「とても思う」「やや思う」と答えた学生の割合は、32.4%である。前章では、大学生の勉強時間が比較的長いものであるという結果が出ていたが、大学生としてふさわしい学力を身につけていると自覚している大学生は意外に少ないことがわかる。

この「大学生としてふさわしい学力を身に付けていると思いますか」という項目の回答は、大学ランクによる違いはあまりみられない。その一方で、「大学生としてふさわしい学力」を身に付けていると思っている学生ほど、勉強時間は長く、大学生活で授業・勉強・研究が占める割合は高いという傾向がある。このことから、大学生は、自分の学力を自分の通う大学のランクから判断するというよりは、実際の勉強量から判断しているのではないだろうか。

それでは、自信との関連はどうだろうか。データをみると、自信がある学生ほど、大学生としてふさわしい学力を身に付けているという傾向がある。大学生としてふさわしい学力を身に付けていると自覚することと、自信は結びついていると考えることができる。

b 自信と「大学」

それでは、大学生活に対して抱いている意識と自信との関連はどうだろうか。おおまかな結果を示しておく次のようになる。自分に自信がある学生ほど、「今の大学に通っていることは自分にとってプラス」、「将来今の大学に通っていることは自分にとってプラス」であると考えている。また、大学に対する満足度も高い。このことから、自信がある大学生たちは、大学を肯定的なイメージでとらえていると考えられる。

3) 自信と将来展望

それでは、自信は、将来展望とどのような関連があるのだろうか。

「大企業に就職する」「よい親になる」「経済的に豊かになる」「社会的に認められる」の4項目について、どの程度実現できると思うかを尋ねた。まず、それぞれについて、「とても可能」「やや可能」と答えた学生の割合を示しておく、「大企業に就職する」35.8%、「よい親になる」83.6%、「経済的に豊かになる」68.6%、「社会的に認められる」73.3%となっている。「大企業に就職する」が、他と比べて低い数値となっているが、それ以外の項目については、約7割以上の学生が実現可能だと考えていることがわかる。

また、自信との関連をみると、自信を持っ

ている学生ほど、いずれの項目に関しても実現が可能だとする回答が多いという傾向がある。

以上、自信と、大学生活に対する意識や将来展望との関連をみてきたが、自信がある学生ほど大学生活を肯定的にとらえており、将来展望も明るいという傾向が明らかになった。しかし、本節の冒頭で挙げたとおり、自分に自信を持っている大学生は、多いとはいえない。多くの大学生は、さきに述べた気楽で悩みがなさそうというイメージとはどうやら少し異なっているようである。

4 学生のタイプごとにみる大学像

(1) 大学生の類型化

これまでみてきたように、現代の大学生は授業以外にも勉強し、高校生と比較しても遊んでいないという「マジメな大学生」という特性を持つ。一方で、自分への自信が低かったり、ストレスを抱えていたりするなど、従来イメージで語られてきた「大学生活を謳歌する」大学生像とは必ずしも一致しない。はたしてそのような日常生活を送る現代の大学生は大学に満足しているのか。現代の大学生にとって大学という場はどのようにとらえられているのだろうか。

こうしたことについて考えていくため、「あなたは大学に関する以下の事柄に対してどの程度満足していますか」という質問の「全体的に」という項目を「とても満足」、「やや満足」と回答した学生を満足度が高い、「やや不満」、「とても不満」と回答した学生を満足度が低いと分類し、それと授業以外の勉強時間にもとづき調査対象の大学生を4つのタイプに分類した。

全体的な満足度が高く、勉強時間が1時間未満の学生を「タイプA」、全体的な満足度が高く、勉強時間が1時間以上の学生を「タイプB」、全体的な満足度が低く、勉強時間が1時間未満の学生を「タイプC」、全体的な満足度が低く、勉強時間が1時間以上の学生を「タイプD」とし、4つの類型間の比較を通して、個々の類型の特性について分析する。

(2) 大学教育に対する意識

学生たちは、授業以外に1日3時間以上勉強する学生もいれば、まったくしない学生もいる。その勉強の多くは、大学での授業に関連するものであろう。授業時間は生活時間の多くを占めており、それ以外に勉強時間という点で生活に大きな関わりのある大学教育を学生たちはどのようにとらえているのか、さきの4類型ごとにみていきたい。

1) 授業に対する意識

「タイプB」の学生は、専門科目をととても必要だと思い、その専門科目に興味深い授業があると思っている。

一方、「タイプC」の学生は、専門科目を必要だとは思ってはいるが、「とても必要」とまでは思っていない。また、専門科目には興味深い授業がないと思っている。同様に教養科目を必要と思わないし、興味深い授業もないと思っている。受けた授業形態も、ディスカッションやプレゼンテーション、実験・実習などの学生自身の主体性が求められる授業形態を受けたいとは思っていない。

「タイプD」の学生は、専門科目がとても必要と思っているが、教養科目はとても必要と思わないし、教養科目に興味深い授業もないと思っている。また、教養は大学で身に付くとは思っていない。

大学に満足していない「タイプC」や「タイプD」の学生は、教養科目に対する必要性が低く、教養が大学で身に付くと考えていないという共通点がある。また、企業が求める能力は大学では身に付かないと考えており、大学に対する全体的な満足度の低さと、授業への不満とは関係があると考えられる。

2) 授業を受ける態度

授業に対する意識が違えば、授業をどのように受けるかの認識も違ってくることが推察される。そこで、授業態度のとらえかたについてみる。

「タイプB」の学生は、授業をさぼらないし、学校もさぼってはいけなしと思っている。授業中に携帯電話をいじったり、私語や途中退出、飲み物を飲む、授業中に化粧をしたりすることもない「マジメ」な授業態度であると回答している。

「タイプC」の学生は、授業をさぼることがあり、学校・授業をさぼること、携帯電話をいじったり、私語、途中退出、居眠り、飲み物を飲んだりすること、教員にたてつくことも本人の自由だと考えている。

授業以外に勉強し、大学に満足している学生は、授業中においても「模範的」な学生である。一方、「タイプC」の学生は授業中にどのようなことをしようと、「本人の自由」だからしてもかまわないと考えており、授業を相対化しているといえる。

3) 教員はどのような存在か

それでは、授業を担当する教員や自分の担当教員をどのようにとらえているのか。

「タイプB」の学生は、担当教員が積極的に学生とコミュニケーションをとろうとしており、教えかたがうまいと思っている。そして担当教員を

好きだと思っている。また、学部に尊敬できる教員がいて、教育にやる気のない教員は少ないととらえている。

教員からの指導には、授業の履修、勉強の仕方、進路指導、常識やマナーを指導されているが、勉強の仕方はもっと指導してほしいと求めている。

「タイプC」の学生は、担当教員が授業に熱心だと思わないし、好きではない。また、学部に尊敬できる教員はおらず、教員はやる気がないととらえている。

指導に関しては、授業の履修や進路指導について教員から指導されていないと感じている。

「タイプB」の学生は教員を肯定的に評価しており、教員にもっと指導してほしいと考えている。一方、「タイプC」の学生は、教員を否定的に評価している。教員に対する否定的な評価が、授業態度にも影響を及ぼしているのではないだろうか。

大学教育に対する意識については、「タイプB」、「タイプC」を両極としてその間に「タイプA」、「タイプD」が位置づく。「タイプB」は、授業、教員とともに肯定的に評価しており、授業態度も「マジメ」な学生である。一方、「タイプC」は、授業、教員に対してともに否定的であり、授業態度もあまりよくない。

(3) 大学に対する意識

それでは、大学生にとって大学とはどのようにとらえられているのだろうか。大学進学・選択の理由とそのメリットのとらえかたから、大学に通うことが自分にどのようなことをもたらすかの認識をみしてみる。

1) なぜ現在の大学に通うのか

まず、なぜ大学に進学することにしたのか、そして大学を選択する際にはどのような基準で選択したのかということについてみしてみる。

「タイプA」の学生は、幅広い教養を身につけて、有名かどうかで大学を選択している。

「タイプB」の学生は、幅広い教養と専門的な知識や技術を身につけたいから進学するのであり、みんなが進学するからではない。また、就きたい職業が決まっている。

「タイプC」の学生は、高卒よりも就職に有利で、まだ就職したくないから、難易度により大学を選択している。

「タイプD」の学生は、高卒より就職に有利だとか、まだ就職したくないから大学に進学したのではない。また、就きたい職業が決まっている。

「タイプB」や「タイプD」といった、勉強をしている学生は、大学に進学した理由もより積極

的である。このことと就きたい職業が決まっている割合の高さとは関連するだろう。また、「タイプA」や「タイプC」の学生は、大学に通っている理由が学問や進路と必ずしも結びついてはいない。

こうした理由により、大学に進学することを決定し、どの大学に進学するかを選択している。

2) 大学に通うことのメリット

それでは、学生たちは現在自分が通っている大学をどのようにとらえているのであろうか。

「タイプA」の学生は、今の大学に通っていることは、今も将来もとてもプラスになると思っている。

「タイプB」の学生は、学部の卒業難易度はそれほど難しいと考えていない。そして、今の大学に通っていることは、今も将来もとてもプラスになると思っている。

「タイプC」と「タイプD」の学生は、今の大学に通っていることは自分にとって今も将来もややプラスと思っている。ただ、大学生活にギャップを感じており、高校の方が楽しいと感じている。また、「タイプC」の学生は学部の卒業難易度を難しいと考えている。

どの類型も、今の大学に通っていることは今も将来もプラスであるととらえている。ただ、どういった点で自分にプラスであると認識しているか、その多様性について検討する必要がある。進学理由や大学選択の理由もその手がかりとなろう。

大学に対する意識については、「タイプA」と「タイプB」、「タイプC」と「タイプD」とが似た傾向を示しているようである。ただ、勉強をしているかということにより自分自身にとっての大学のとらえかたに若干違いがある。

現代の大学生にとって、大学はたんに大学生活を「エンジョイ」する場だとはいきれなくなっているようである。以前と比べ大学生にとって大学という存在は大きくなったのか、それとも小さくなったのか。ただし大学生にとっての大学という位置づけが変化していることは確かであろう。

参考文献

武内清 2003 『キャンパスライフの今』
玉川大学出版部

詳細については、当日資料を配布します。